

「肝転移」メカニズムと臨床

金沢大学がん研究所腫瘍外科 磨伊 正義 編集

癌研究会付属病院

武 藤 徹一郎

癌を専門とする医師にとって“転移を制する者は癌を制す”とはよく知られた言葉である。転移の代表はリンパ行性転移と血行性転移であり、後者で最も多いのが肝転移であることもよく知られた事実である。転移にはこの二大本流が存在するにもかかわらず、なぜか拡大郭清によるリンパ節転移へのアプローチが従来からの主流であり、肝転移に対するアプローチは後塵を拝していたように思う。切除可能な症例が決して多くはなかっただけでなく、転移機構の研究手法も限られたものであったのが、肝転移の研究に勢いがなかった主たる理由であろう。

ところが、最近の分子生物学的研究の発展のおかげで、にわかに肝転移機構の研究は花形の1つになった。反対にリンパ節転移のほうはどうなっているのかと叫びたいほどの違い方である。本書は磨伊正義教授を中心に、清木元治教授、高橋豊助教授が協力者となり、ほとんどが金沢大学の関係者で執筆された、肝転移に関する好著である。著者も序文に記しているように、肝転移に焦点を絞った成書は日本では類をみない。誠に時宜に合った名著と言うべきであろう。

衆知のごとく、癌細胞が肝臓に着床して転移巣を形成するまでには、様々な難関を突破して生き残ってゆかねばならない。それはバイアスロ

ンのチャンピオンにも例えられる、癌細胞にとってはタフワークの連続であり、1個の細胞がそれらすべての難関を突破する能力を備えているとはとても考えられない。その難関がどんなものなのかは、本書を読めばよくわかる。血流内における防御機構や抗血管新生の方面からの研究のみならず、間質における癌細胞とのインターアクション、すなわちMMPの関与が最近のトピックスの1つであり、治療への応用が既に始まっている。癌が転移巣を形成するまでの機構を解明する目的は、どこかでそのプロセスを遮断し転移を予防したいからであり、この研究は臨床家、特に外科医にとって癌治療のゴールの1つと言っても過言ではない。この意見で、本書はすべてのsurgical oncologistに推薦できる好著である。

本書は、基礎編と臨床編とに分けられており、前編では肝転移機構の基礎のすべてが、後編では肝転移の診断と治療法のすべてが将来展望も含めて詳細に述べられており、どこから読み始めても新しい知識が吸収できる。文献も新しいものも含めて十分に網羅されている。

今世紀の初頭、ドイツ病理学はアショッフ学派が全盛で、細胞からの癌研究が主流であった。しかし、その時期に細胞ではなく、その周囲の基底膜に注目していた学者がいた。

ライプツィヒ大学のヒュックという病理学者である。細胞病理学が主流であった時代に基底膜を研究対象にするのは、少々ひねくれ者であったのかもしれないが、癌転移機構の中で基底膜や間質の重要性が判明したことを知ったら何と言ったであろうか。ちなみに、筆者の父はヒュックの弟子で、かたくなに基底膜の研究を続けていた病理学者であった。本書の基礎編に目を通して、学問の流行の長い周期にふと思いを馳せた次第である。

編集者の磨伊教授は筆者と同じ昭和38年卒で、20年来の親友である。常日頃から臨床家ならびに研究者としての真摯な態度に心から敬服していたが、本書を読んでその敬服は更に倍加した。著者の専門は胃癌を初めとする胃疾患であり、北陸地方の早期胃癌研究を発展させた功績はつとに知られているが、いつの間に肝転移へと研究対象を転移させていったのか、その努力に心から敬意を表したい。この分野の研究は日進月歩である。数年の間に内容は飛躍的に進歩しているであろう。願わくばそのころに改訂版を出して、更なる啓蒙に努めていただきたいと思う。

● B5 頁240 図64 カラー写真19
写真90 表47 2000
定価(本体12,000円+税) 円400